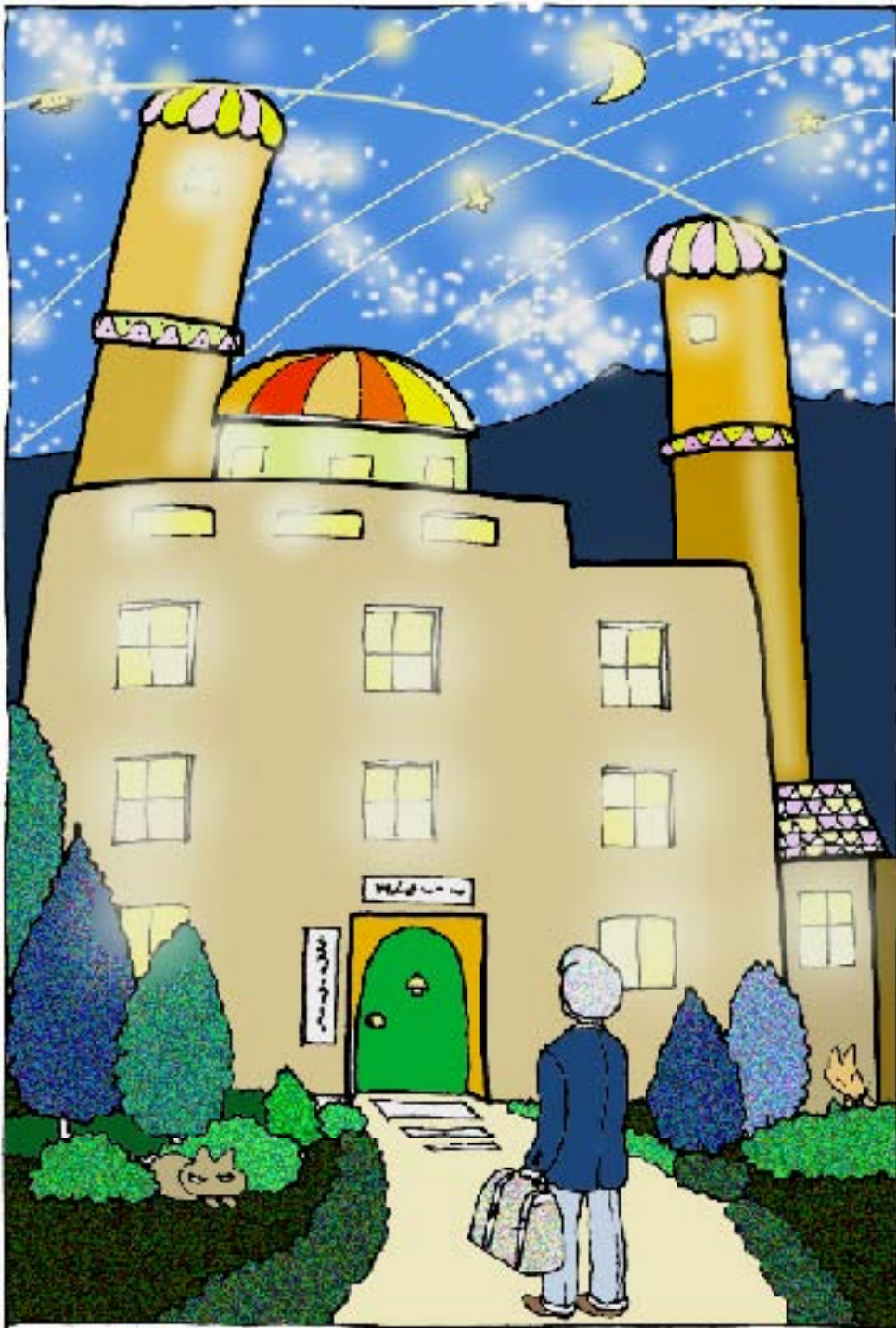


グスコーフドリの伝記

宮沢賢治



絵・・・本宮 そらみ



グスコープドリの伝記

宮沢賢治

5 イーハトーヴ火山局

か
ず
大
に
が
て
上
す
し
の
土
た
は
る
柱
っ
に
、
出
る
り
博
を
ろ
し
い
立
関
と
の
見
た
。
大
名
こ
う
高
く
玄
す
り
目
当
た
。
一
て
と
、
た
白
は
ま
ド
ー
き
し
ボ
あ
た
で
し
り
り
し
ブ
、
突
ま
し
ク
の
い
物
を
き
ド
押
、
り
を
し
ク
刺
着
建
形
っ
ブ
を
て
取
り
内
が
、
名
と
の
な
く
。
鈴
来
け
ド
案
が
た
っ
ろ
う
に
た
び
て
受
ブ
へ
リ
っ
や
い
よ
ら
し
呼
出
を
ぐ
室
ブ
も
て
な
房
の
り
っ
人
名
、
き
な
ら
ね
き
は
夜
お
が
ぐ
た
と
大



そこにはいままでに見たこともないような大きなテーブルがあって、そのまん中に一人の少し髪の毛の白くなった人のよさそうな立派な人が、きちんとすわって耳に受話器をあてながら何か書いていました。そしてブドリのはいって来たのを見ると、すぐ横の椅子を指さしながら、また続けて何か書きつけています。

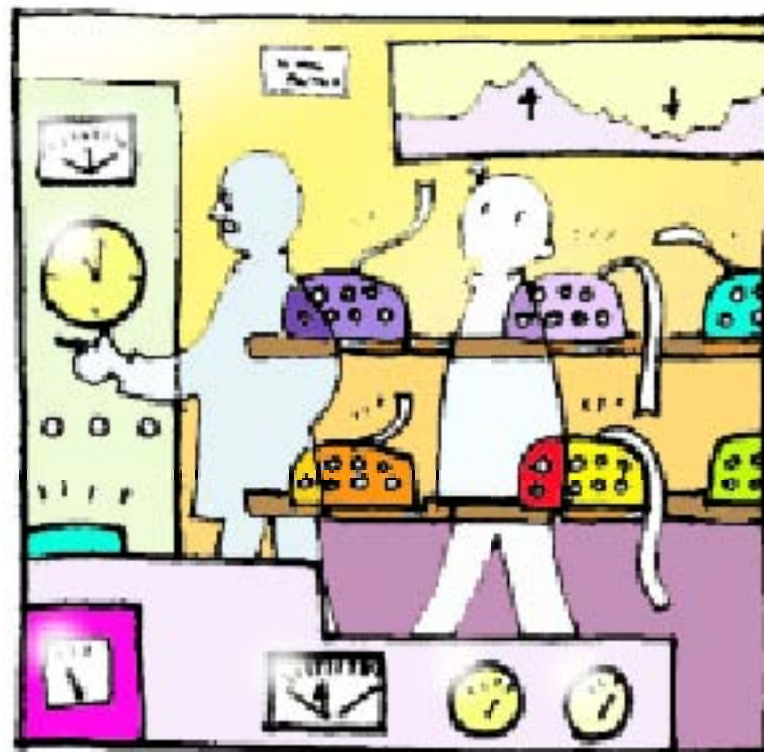
その室の右手の壁いっぱい、イーハトーヴ全体の地図が、美しく色どった大きな模型に作ってあって、鉄道も町も川も野原もみんな一目でわかるようになっており、そのまん中を走るせぼねのような山脈と、海岸に沿って縁をとったようになっている山脈、またそれから枝を出して海の中に点々の島をつくっている一列の山々には、みんな赤や橙や黄のあかりがついていて、それがかわるがわる色が変わったりジーと蝉のように鳴ったり、数字が現われたり消えたりしているのです。



下の壁に添った棚には、黒いタイプライターのようなものが三列に百でもきかないくらい並んで、みんなしずかに動いたり鳴ったりしているのです。ブドリがわれを忘れて見とれておりますと、その人が受話器をこっと置いて、ふところから名刺入れを出して、一枚の名刺をブドリに出しながら「あなたが、グスコブドリ君ですか。私はこういうものです。」と言いました。見ると、〔イーハトーヴ火山局技師ペンネンナム〕と書いてありました。その人はブドリの挨拶になれないでもじもじしているのを見ると、重ねて親切に言いました。

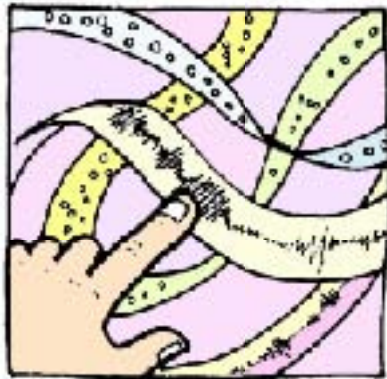
「さっきクーボー博士から電話があったのでお待ちしていました。まあこれから、ここで仕事をしながらしっかり勉強してごらん下さい。ここの仕事は、去年はじまったばかりですが、じつに責任のあるもので、それに半分はいつ噴火するかわからない火山の上で仕事するものなのです。それに火山の癖というのは、なかなか学問でわかることではないのです。われわれはこれからよほどしっかりやらなければならぬのです。では今晚はあっちにあなたの泊まる場所がありますから、そこでゆっくりお休みなさい。あしたこの建物じゅうをすっかり案内しますから。」

次の朝、ブドリはペンネン老技師に連れられて、建物のなかを一々つれて歩いてもらい、さまざまの機械やしかけを詳しく教わりました。その建物のなかのすべての器械はみんなイーハトーヴじゅうの三百幾つかの活火



山や休火山に続いていて、それらの火山の煙や灰を噴いたり、熔岩を流したりしているようすはもちろん、みかけはじっとしている古い火山でも、その中の熔岩やガスのもようから、山の形の変わりようまで、みんな数字になったり図になったりして、あらわれて来るのです。そしてはげしい変化のあるたびに、模型はみんな別々の音で鳴るのでした。

ブドリはその日からベンネン老技師について、すべての器械の扱い方や観測のしかたを習い、夜も昼も一心に働いたり勉強したりしました。そして二年ばかりたちますと、ブドリはほかの人たちと



いっしょにあちこちの火山へ器械を据え付けに出されたり、据え付けてある器械の悪くなったのを修繕にやられたりもするようになりましたので、もうブドリにはイーハトーヴの三百幾つの火山と、その働き具合は掌の中にあるようにわかって来ました。

じつにイーハトーヴには、七十幾つの火山が毎日煙をあげたり、熔岩を流したりしているのでしたし、五十幾つかの休火山は、いろいろなガスを噴いたり、熱い湯を出したりしていました。そして残りの百六七十の死火山のうちにも、いつまた何を始めるかわからないものもあるのです。

ある日ブドリが老技師とならんで仕事をしておりますと、にわかにはサンムトリという南のほうの海岸にある火山が、むくむく器械に感じ出して来ました。老技師が叫びました。

「ブドリ君。サンムトリは、けさまで何もなかったね。」

「はい、いままでサンムトリのはたらいたのを見たことがありません。」

「ああ、これはもう噴火が近い。けさの地震が刺激したのだ。この山の北十キロのところにはサンムトリの市がある。今度爆発すれば、たぶん山は三分の一、北側をはねとばして、牛やテーブルぐらいの岩は熱い灰やガスといっしょに、どしどしサンムトリ市におちてくる。どうしても今のうちに、この海に向いたほうへボーリングを入れて傷口をこさえて、ガスを抜くか熔岩を出させるかしなければならない。今すぐ二人で行こう。」二人はすぐにしたくして、サンムトリ行き汽車に乗りました。

